
『ソラ』の旅

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ソラ』の旅

【Nコード】

N8511B

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

目の見えない中学生、西條あおいはピアノのレッスンに行く途中、引っ手繰りに遭ってしまう。押し倒されて方向を見失っていたあおいを助けてくれたのは、ソラと名乗る声だった。彼は引っ手繰られたバックまで取り返してくれたのだ。あおいは、ソラの不思議な気配に引かれていた。

【出逢い・1】（前書き）

これは児童文庫を意識して書いた作品の為、ストーリーはきわめて
かんたん明快です。ただ、楽しんでいただければ幸いです。

【出逢い・1】

目の前に広がるのは果てしない暗闇。

そこには一欠けらの光もなく、何かの影もない。歩いて走っても、陽の光の下に立とうとも、その闇から逃れる事はできない。

何処までも続くあまりにも澄み切った暗闇。そこが、彼女の生きる世界なのだ。

西條あおいは、白いステッキを左右に振りながら歩いていた。

別に彼女は楽しんでそのステッキを振っているわけではない。それが、彼女の目なのだ。

自分の足元より前方に出して左右に振るそのステッキに何かがつかれれば、そこには何か障害物が在ると言う事だ。だから、ちょうど自分の身体の幅にステッキを振る。そうやって、不意に躓く危険を防ぐのだ。

そう、彼女は目が見えない。

先天性の病気、つまり、生まれた時から彼女は目に障害を持っていた。

あおいは三歳までは僅かに目が見えていた。ただ、角膜の異常によってかなり重度の弱視で、彼女の目に映る全ての景色は朧に、絵の具を滲ませたようにぼやけていた。それは、両親の顔も同じだった。

三歳を過ぎた頃、微かに見えていた視力も次第に衰えて、五歳になる頃には完全に光を失ってしまった。

それでもあおいは持前の明るさで、全てを乗り切ってきた。

彼女はまだ十四歳だが、通常の健康な人の数十倍の苦悩を経験してきた。

小学校に入学したあおいは、最初は特別学級に入れられた。近くに盲学校も無く、地元の小学校が受け入れてはくれたものの、通常の児童と一緒に授業が受けられないと判断された為だ。

確かにノートを取る事はできないが、その分彼女の記憶力は優れていた。

小学校に通いながら、あおいは点字の勉強をした。3年生になる頃には、点字の教科書なら普通に読めるようになり、彼女の学力を認識した教師の働きかけによって、あおいは普通学級で勉強ができるようになった。

確かに体育の授業は出来ないし、運動会も学芸会も参加する事は出来ない。父兄の間では、彼女が健常者と一緒に勉強するのは酷なのではないかと言う声さえあった。

しかし、あおいは、自分をそんな風には思っていない。

ただ、目が見えないだけ。それだけだ。

それ以外の身体的機能は普通の人と変わり無いから、出来るだけ自分の事は自分でやる。どうしても、出来ない時、誰かに手を借りる。

何時頃からそう思えるようになったのかは、あおい自身忘れてしまったが、それが彼女の考えだった。

空は限りなく青く突き抜けて広がり、白い雲がゆっくりと目には見えない速さで動いていた。太陽は光の輪を発して、暖かな陽射しが注いでいる。

あおいは、太陽の匂いを感じながら、降り注ぐ光を体感していた。青い空も、白い雲も見えないけれど、それだけで今日の清々しい天気を感じる事が出来た。

彼女はバスに揺られて、駅裏にあるピアノ教室に週二回通っている。小さな教室だが、盲人用のレッスンを行っているのは近くではそこだけなのだ。

ステッキを軽く降って、周囲にそれが当たる感触から進む方向を定めていく。

バスの降車口のステップを慎重に踏んでから地面に足を着く。

もう、何度もやっている事だから、彼女にとっては何でも無い事だ。

しかし、もし普通に目の見える人が、いきなり目を瞑って同じ事に挑んだとしても、おそらくバスの降車口に辿り着く事さえ出来ないだろう。

「手をお貸ししましょうか」

バス停から少し歩いた所で、男の人の声が彼女の右後方から聞こえた。

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます」

あおいは丁重に断って、歩きなれた道を前に進んだ。その直後、いきなり右腕を捕まれてギクリとした。

「いいから、いいから。連れて行ってあげますよ」

さっきの男だった。

「いえ、大丈夫です。すみません、手を離してください」

あおいはそう言って、捕まれた腕に力を込めた。

「大丈夫ですよ。さあ、こちらへ」

男はゆっくりと右側へ、彼女を導いた。盲目の彼女には気付かれないと思ったのだろうか。しかしそれが、進もうとしている方角でない事は、彼女には直ぐに判った。

「すいません。何処に？あたしは真っ直ぐ行きたいんです」

「大丈夫ですよ」

男はそればかりだ。

そんなに年のいった声では無い。高校生？いやもう少し上だろうか。

彼女はそんな事を考えながら、自分の身体が先ほどから九十度は転回した事を悟った。駅前通りを走る車の音が次第に遠ざかっていく。

「ちょっと、離してください」

あおいは身の危険を感じて、力強く男の手を振り払った。

その瞬間、あおいの持っていたバックが強く引っ張られて、反対に身体は強く押された。

「きゃあ」

彼女は地面に勢いよく転がってしまった。

「ちよっと……」

バックを持っていかれた……

【出逢い・2】

「どろぼう！ 誰か、すみません、誰かいませんか」

そこは、バス停から少し歩いた所を住宅街の路地へ向かって入った場所で、寂れた公園と何処かの会社の寮に挟まれて人通りは無かった。

彼女が、駅前通りで腕を捕まれた時に強く拒絶していれば、行き交う誰かに助けてもらえたかも知れない。しかし、親切心を持って近づいてくる人を、強く拒絶するのは、ある意味勇気がいるのだ。

「すみません、誰かいませんか」

彼女は転んだ拍子に、自分の位置関係が全く判らなくなり、どっちに向かえば駅に戻るのか方向を見失ってしまった。

それどころか、手から落としたステッキを犯人が蹴飛ばして行っただので、周囲を確かめる術もない。

あおいは両手を前に突き出して、這うように辺りを覗った。

これは、目の見える人が、突然暗闇に呑み込まれる状況に似ている。

確かに、あおいは普段から暗闇の世界で暮らしているが、ステッキを振ることで周囲の状況を確認し、自分の立っている姿勢から進む方向を割り出し、自分の中で地図を作り出す。

しかし、自分が何処にいて、どの方角を向いているか判らない今、彼女は本当の意味で盲目だった。

「そうだ、音。駅前からそんなに離れていないはず。駅の音を……」

あおいは落ち着きを取り戻して耳を澄ました。

後ろだ。後ろから車の走る音、そして微かな電車のブレーキの音。駅は後ろだ。

彼女はゆっくりと、四つん這いのまま身体の向きを変えた。

『あと少し、三十度くらい左を向いて』

誰かの声が聞こえた。いや、聞こえた気がしたのか。

「誰？」

さっきの男の声ではない。心地よく通る優しい声。

誰かが静かに近づく気配と共に、近くでコツンと音がした。何かを地面に置いた音。

『右手を少し伸ばして。ステッキを置いたよ』

あおいは、再び聞こえた声に従い右手をゆっくりと差し出すと、握りなれたモノがそこにはあった。

「あ、ありがとう」

あおいはそのままゆっくりと立ち上がろうとした。

『まって。バッグを取り返して来たよ。左手を伸ばして』

彼女は言われるまま、その声に従って今度は左手をそっと伸ばした。すると、彼の言葉通りバッグがある。

あおいはバッグを大事に抱えると、中に入れていた物を確認した。

『大丈夫。まだ手をつけていないはずだよ』

彼の言った通り、あおいは指先で自分の財布やピアノのレッスンに使う楽譜を確認できた。

彼女はそっと立ち上がって

「有難う御座います。あの……」

あおいは戸惑った。

気配が……

目が不自由な者は得てして他の感覚が敏感になる。気配を感じる事もその一つだ。

目の前に感じる気配。立ち上がったあおいは、それがやたらと低い位置から感じる事に気が付いた。

彼女だって背が大きい方ではないのに、その気配はあおいの腰くらいしかないのだ。そして、太陽の陽をいっぱいに浴びた野原のよな匂いがした。

……子供？

いや、小さな子供の声ではなかった。

「あの……どなたか存じませんが、有難う御座います」

あおいはとりあえず、もう一度お礼を言って

「あの…… お名前は……」

少しの沈黙があった。

『僕の名前はソラ』

「ソラ…… さん？」

『もう行って』

あおいはその声に後押しされるように、ゆっくりと歩き出した。

『そう、そのまま真っ直ぐ行けば直ぐに大通りだよ。気を付けて』

その声の後に、気配が左から後ろへ動いて行った。

タタタツと言う小さくて小気味良い足音が聞こえた。

【友達・1】

あおいは考えていた。周囲で他の生徒達の話し声が心地よく聞こえる中で、彼女は思わず自分の世界に入り込んでいた。

あの足音。アレは人ではないのだろうか。そもそも、本当にあの時、あそこに誰かがいたの？

でも、白い杖を取ってくれたり、引っ手繰られたあたしの鞆を取り戻してくれた誰かはいたのだろう。

でも…… あれは、耳から聞こえた声ではなかった。まるで心の中を通して、頭で響くような不思議な声。

「あ・お・い」

「圭子？」

山下圭子が、あおいに近づいて声をかけた。彼女は小学校からの友人で、いつも近くであおいを支えてくれる。

あおいは盲学校でなく、普通の中学に通っている。小学校もそうだった。

近くに盲学校が無いせいもあるが、この地域の学校が彼女を受け入れてくれた事が一番の理由かもしれない。

そのかわり、黒板を見ることが出来ないので、彼女は携帯のメモリレコーダーに授業の音声を録音する。

もちろん、一番困るのがテストで、彼女には点字に変換した問題用紙が渡される。それを手の空いている教員が口頭であおいの回答を聞き、書き込む事で解決していた。

休み時間、彼女は校庭へ出るのが好きだった。

色々な声、音、風の匂い。それらを感じているだけでも、自分まで元気に走り回っているような気分になる。

今も昼休み中、校庭の片隅のベンチに座っていた所を、圭子が見つけて声を掛けてきたのだ。

「どうしたの？ 難しい顔しちゃって」

圭子が、あおいの肩をポンツと叩いて言った。

「えっ、ううん。なんでも」

あおいはそう言って首を横に振ってから

「ねえ、圭子。ちょっと、あたしの前にしゃがんでみて」

「何？ どうしたの？」

「いいから」

圭子は、ベンチに腰掛けたあおいの正面にしゃがむと「しゃがんだよ」

「もう少し離れて」

「えっ、あたしとの距離わかるの？」

「息づかいが聞こえるもの」

「ええっ…… あたし、そんなに鼻息荒い？」

あおいは思わず笑って

「そうじゃないよ」

あおいは気配と息使いなどで、他人との距離をある程度見切る事が出来る。

それは、電車やバスに乗った時、むやみに隣の人とぶつからない為に自然に身に付いたものだ。

圭子はしゃがんだままの姿勢で、ずりずりと後ろへ下がった。

あおいが感じる圭子の気配も次第に遠ざかって行く。

「どう？」

「それで、あたしからどれぐらい？」

「二メートルってところかな」

あおいはじっと、圭子の気配をさぐる。

「ねえ、何なの。これ」

「うん。ちょっと」

そう言って、あおいは再び笑ってみせると

「ありがとう。もういいよ」

「もう…… 何？ 教えて」

圭子があおいにじゃれ付くように抱きついた。

「何でもないのよ」

あおいは、圭子に身体を揺らされながら言った。
やっぱり何か違う。

あおいは、昨日自分を助けてくれた人がしゃがんでいたのかな。
などと思ったのだが、それとも何となく違った。

そもそも低い位置のまま、あの気配は素早く立ち去ったのだ。

【友達・2】

「あおい、なんだよ歩きか？」

学校帰り、小林カズキが後ろから駆けて来て声を掛けた。「なんだよ」と言った割りに、彼はこの二人をめがけて走っていた。

「うん。今日はね」

あおいは学校の登下校時、本来タクシーを使う。

入学の際、登下校中に何かあっては、と言う学校側の要望があった。それに母親もその方が安心なようだ。

しかし、あおいはこうして時々圭子と一緒に歩いて帰る。

健常者なら十五分ほどの距離だ。もちろん、あおいのペースでは倍近くの時間が掛かるが、辺りの音や匂いを感じながら歩くのが彼女は好きだった。

圭子も嫌な顔ひとつ、と言ってもあおいには見えないが、そんな素振りはいま一つ見せずに付き合ってくれる。

圭子自身も、あおいとお喋りしながら帰るのは楽しいのだ。

「カズキ、部活は？」

隣にいた圭子が言った。

「大会が終わったばかりだから、今日は、軽くグラウンドを流して終わりさ」

「え、もう走って来たの？」

「ああ、軽いもんさ」

小林カズキは、陸上部で走り幅跳びをしている。背はそんなに高くは無いが、活発で明るい為、クラスでも人気がある。

「あたし達の歩くペースが、よっぽど遅いのね」

あおいが苦笑いで言った。

「そんな事無いよ。人それぞれなんだからさ」

圭子がそう言って笑うと、カズキは

「そうだよ。俺なんて、もし目を瞑っていたら、きっとまだ校舎の

中だぜ」

その言葉にあおいが思わず笑い、三人の声が下校途中の住宅街に響き渡った。

カズキも圭子も、あおいの目が見えない事を話題にしない。と言う事はしない。

何でも普通に話し合う方が、彼女にとって気が楽だと言う事を二人は知っているのだ。

だから平気で「俺の目が見えなかったら」なんて会話も出てくる。それでなくとも、目の見えないあおいは四六時中一緒にいる誰かに何らかの気を使わせてしまうことも多い。

それがもつとも感じないのがこの二人で、それはあおいにとって心地よいものだった。

走って来たカズキが何時の間にか自分達と一緒にいる事にふと気がついたあおいは

「別にあたし達に付き合わなくていいんだよ」

彼女なりに気を利かせたつもりだった。

「ああ、まあ……どうせ俺も暇だしな」

「へえ、暇な割には、何だかここまででは急いでたみたいだけど」

圭子が悪戯っぽい笑みでカズキに言った。

「急いでるんなら、遠慮しないで。引き止めてごめんね」

あおいは、カズキが自分達に遠慮をしてここから抜け出せなくなっているのだと思ったのだ。

「いや……」

「急いでたのは、あたし達に迫いつくまでなんだよね」

再び圭子がカズキに言う

「うるせえな」

と、小声で言いながら、圭子をつついた。

カズキはグラウンドを走っているときに、彼女達が校門から出て行くのを見かけ、急いでランニングを済ませて追いついて来たのだ。あおいと一緒に歩けるチャンスなど、そう滅多にない。

クスクスと笑う圭子の隣で、あおいは何だか判らなくて、ただポカンとしているだけだった。

【キーホルダー】

「ただいま」

あおいが玄関に入ると、母親がリビングから飛んで来た。

「遅かったじゃない。また、歩いて来たんでしょ」

「う、うん。どうしたの、そんなに慌てて」

母親は、自分だけやけに気持ちが高揚していた。

「あおい、ドナーが見つかったのよ」

母親は言った。

「ドナー？」

「角膜よ。角膜移植が出るのよ」

母親は、もう居ても立ってもいられないと言う様子だった。

国内には角膜のドナーが少なく、移植の順番を待つ患者が多い。

あおいが角膜移植の希望を申し出てから2年が過ぎていた。

「そう……なんだ」

あおいは、そう言って靴を脱いだ。

「なによ。気の無い返事ね。目が見えるようになるかもしれないのよ」

「かも。でしょ」

「そりゃあ、百パーセントと言うわけには……」

あおいの様子に、母親の声も幾分かトーンダウンしてしまった。

角膜の移植手術は、現代ではそう難しいものではなく成功率が九十パーセントにも及ぶ。それでも、必ず視力が回復するという保証は無いのだ。

「でも、見えるようになる確立が高いんだから」

廊下を歩き出すあおいに母親が言った。

「そりゃ、そうだけど……手術台に乗るのは、あたしなんだよ」

あおいは、そう言って、自分の部屋に入ってしまった。

確かにあおいも角膜移植を試みる気持ちはあった。しかし、いざ

移植手術が決まったと言われた瞬間、その喜びよりも、言いようの無い不安が沸き起こったのだ。

目玉を切るのだ。いったいどんな風に切られるのか……それで、もし何もならなかったら……そう思うと、不安で仕方ないのだ。何もしなければ、何もならないのが当たり前なのだから、諦めがつくというものだ。

『それは違うな』

その声に、あおいはハツとした。

「ソラ？」

あおいは思わずそう口にした。一度聞いた声は忘れない。確かに、あの時間いた、静かによく通る優しい声。

あおいの家は二階建てだが、一階の庭に面した和室が彼女の部屋だ。絨毯を敷こうかと言う母に、あおいは畳のままがいいと言った。畳の香りが、あおいは好きだった。

縁側伝いに廊下があつて、障子の戸を開けて彼女の部屋へ入る。

その障子の外、縁側の廊下に気配がした。

「ソラ？ いるの？」

あおいは部屋の障子戸を開けた。

『そこで止まって』

ソラの声に、あおいはちょうど戸の敷居の所で止まった。

この前と同じ、野原の匂いがした。

「どうしてあたしの所に来るの？」

あおいはその場に座り込んで言った。

『さあね。キミが気に入ったのかも』

「へんなの」

『僕は、変わり者なんだ』

ソラの言葉に、あおいは思わず笑い声を出した。

その時、廊下にコツンと何かを置く音がした。

『今日はこれを届けに来たんだ』

「何？」

『真っ直ぐ手を伸ばして』

あおいはソラに言われるまま、座った状態で手を前に伸ばした。

「これは……」

『この前、引っ手繰りからバッグを取り返したときに取れてしまったようだね』

あおいが手にしたモノ。それは、彼女の鞆に付いていた小さなトイプードルのキーホルダーだった。

あの事件の後、あおいはキーホルダーが無い事に気付いていたが、鞆が戻った事で諦めていた。

「ありがとう」

あおいはキーホルダーを握り締めて言った。そのキーホルダーは、父親がピアノ教室用の鞆と一緒に買ってくれたものだった。

『リングが開いてしまっているから、誰かに直してもらうといい』

ソラはそう言った後に『キミは、手術が怖いんだね』

あおいは応えなかった。

『でも、もし目が見えるようになれば、自分の目で色々なモノを見ることが出来るんだよ』

「でも、盲学校に通う友達が前に手術を受けたけど、ダメだったよ」
『だからって、あおいもダメとは限らないだろ』

「そうけど……」

あおいは少し考えていたが

「ねえ、目が見えるようになったら、ソラの顔も見れる？」

『さあ、それはどうかな』

あおいは少し残念そうな表情をして

「あれ？ あたし、あなたに名前を教えたっけ？」

『僕には何でもわかるのさ』

ソラは、フフツと笑って、縁側からいなくなった。

「あおい？ 誰と話してたの？」

畳んだ洗濯物を抱えた母親がやって来て、尋ねながらふと目を止めると

「あら、ここ開いてたかしら」
そう言って、庭に面した廊下のガラス戸を閉めた。

「ねえ、お父さん。これ直せる？」

その晩、あおいは仕事から帰宅した父親にキーホルダーを見せた。
「どうしたんだ」

父親は、あおいから手渡されたキーホルダーをじっと眺めて言った。

「どこかに引っ掛けたみたい。鞆から取れちゃったの」

あおいは、この前引っ手繰りに遭った事を両親に話していない。
心配をかけるのもいやだったし、危ないからと言って、一人で外出できなくなるかもしれないと思ったからだ。

もちろん、ソラの事も誰にも話してはいなかった。

「そ、そうか。大丈夫。直るよ」

父親はそう言って笑うと、玄関から工具箱を持って来てペンチを取り出し、ほんの少し開いてしまったキーリングを元に戻した。

「あおい、鞆を持っておいで。付けてあげるよ」

「もう出来たの？」

「ああ。父さん器用だからな」

父親は、少し得意げに笑うと、小さな歯形のついたキーホルダーをあおいの鞆に取り付けた。

【月影】

銀色の満月に照らされた紺青の夜空には、雲の波がゆっくりと流れていた。

あおいはその夜、何かに導かれるようにふと目が覚めた。彼女の場合、眠っても闇、起きてても闇なのだ。

しかし、この時は違っていた。

暗闇の中に薄明かりが差し、部屋の障子戸が白く浮き出ているのが見える。

廊下に月影が入り込んで、障子戸を照らしているのだ。

あおいは何の不思議もなく、ベッドから起き上がって戸口まで歩いた。

一瞬明かりが消えて暗闇に包まれた。雲の波に月が呑みこまれたのだろう。

その雲が抜けて、再び廊下に明かりが入ると、大きな四本足の影が障子に浮かんた。

あおいは息を呑んだが、不思議と怖いという感覚は無かった。

そこには、記憶に新しい優しい気配があったから。

「ソラ？」

あおいはその影に向かって声を掛けた。

廊下のガラス戸が開いているのだろう。風が入り込む音が聞こえ、微かにカーテンがはためく影が映った。

「そこにいるのは、ソラでしょ」

彼女は、障子に映る影がソラだと判った。

『どうだい、目が見えるっていいだろう』

ソラは言った。

「でも、やっぱり怖いよ。目玉を切られたらどうなるのか考えると、怖くてたまらないよ」

『大丈夫さ。友達が助けてくれる。あおいはいい友達がいて羨まし

い』

「ソラは？ あなたには友達はいないの？」

『僕はいつも一人さ……でも、今はあおいと言う友達がいるけどね』

それを聞いて、あおいは微笑むと「うん。そうだね」

「でも…… あなた、人間じゃないの？」

『僕はソラ。それ以外の何者でもないんだ』

あおいは障子戸に手を掛けた。

途端にふっと明かりが消えたような暗闇が彼女を包み込んだ。

それは、何時も見慣れた漆黒の闇だった。

「夢……」

あおいはベッドの中で、暗闇に包まれたまま目を覚ました。

【暗雲】

その日は重そうな灰色の雲が空一面を覆い尽くしていた。家を出てタクシーの待つ通りへ出たあおいは

「雨の匂いがする…」

「今日は夜まで降らないって言ってたけど、傘持っていく？」

あおいの言葉を聞いた母親が言った。あおいの「匂い」は当たる事を知っているのだ。

母親が玄関口へ戻って折り畳み傘を持って来たので、あおいはそれを受け取ってタクシーに乗り込んだ。

「放っておいたらどうです」

「いや、ダメだ。俺の気が収まらねえ」

あおいがタクシーに乗る姿を、少し離れた路地の影から覗う二人の男の姿があった。

「でも、相手は目の不自由な娘ですよ」

「バカ野郎。俺のこの手を見る。あの女のせいなんだぞ」

片方の男の右手は肘の所まで包帯でぐるぐる巻きになっていた。

「あおい。いよいよだね。手術」

学校の教室で、圭子が声を掛けて来た。

翌日から入院して、三日後に角膜の移植手術が行われるのだ。

「ううん……」

「なんだなんだ、浮かない顔して」

「だって、成功するとは限らないんだよ」

「それだったら、なおさらやってみなくちゃ判んないじゃん」

圭子はそう言って、あおいの背中をポンツと叩くと

「ねえ、目が治ったら一緒に遊園地行こうね」

「えっ、遊園地？」

あおいは考えた事も無かった。自分が遊園地の乗り物やお化け屋敷で、今までには無かった人工の喜怒哀楽に溺れる楽しみ。

そんな事は自分には関係ない世界だと思っていた。

「うん。行く」

あおいは、少しだけ手術の不安が和らぐのを感じて明るく笑った。放課後、校庭の端を横切って校門へ向かうあおいに、カズキが走り寄った。

「あおい、手術頑張れよ」

カズキは息を切らしながら言った。

「うん、ありがとう。でも、頑張るのはお医者さんだよ」

あおいはそう言って、笑って見せた。

白いステッキを左右に振りながら歩き去るあおいの姿を、カズキは肩で息をしながら見送った。

本当はもっと言いたい事があったのだが、カズキはそれを言い出せず、明日からしばらく会えない彼女の後ろ姿を名残惜しそうに見つめた。

あおいが校門を出たその時、彼女の前に一台の乗用車が滑り込んできて止まった。

勢いよく後ろのドアが開くと、あおいはあっという間に車の中に引きずり込まれて、悲鳴を上げる暇も無かった。

「あおい！」

それを見たカズキは全力で校門まで走ったが、乗用車は勢いよく走り出して行った。

「ちきしょう！」

カズキは、舌打ちしながら地面を蹴っ飛ばした。

ふと見ると、直ぐ後ろにタクシーが止まっていた。あおいを乗せるはずだったタクシーだ。

カズキは何も考えずにそのタクシーに飛び乗ると

「今の車を追ってください」

【追跡】

「なんだい、あれ」

タクシーの運転手は何時も自分が乗せるはずのあおいが、おかしな車に押し込まれるのを見ていた。

「人さらいですよ。急いで追いかけて」

「ええ？ そうなのかい」

いささか呑気な運転手にカズキは「早く追いかけて。見失っちゃう」

「ああ。判った」

タクシーも勢いよく走り出した。

さっきの乗用車が、かなり離れた路地を右に曲がるのが見えた。

タクシーの運転手は、それを見て直ぐに目の前の路地を右折した。

「ちょっと、オジサン」

カズキが不安げに声を上げた。

「大丈夫だ、こっちの方が、大通りに信号一つ分早く出る」

運転手はそう言って、ハンドルを握り直した。

下校時間の為、歩道にはたくさんのお学生がいた。

緩いカーブを左、右と抜けると信号が見えた。その直ぐ先は大通りだった。

ちやうど青信号になった交差点を、大通りに出て走ると、その先からあおいを乗せた乗用車が出て来た。

「よっしゃあ」

カズキよりも、運転手が奇声をあげた。

「追いつける？」

「このまま追いかける事はできると思うが、止めるのは難しいな」
タクシーは慎重に車線変更を繰り返して、あおいの乗った乗用車を追った。

その時、カズキは窓の外に目を止めた。

歩道を走る一頭の大きな犬。

車と同じスピードで走っている。

流れる景色の中で、ヒラリヒラリと人波を避けて全力で走るその犬を、カズキは不思議な気持ちで眺めていた。

「しまった。ちきしょう」

運転手が声を上げて、タクシーが急ブレーキで止まった。

赤信号に引っ掛ったのだ。あおいを乗せた乗用車が、遠ざかって行く。

再び青で走り出したが、あの乗用車の姿は見つからなかった。

「ちきしょう、何処かを曲がったか」

運転手が悔しそうに舌打ちした。

「オジサン、あの犬……」

「ああ？ 犬がどうした」

「あの犬を追って」

さっきの犬だった。タクシーと並んで走っていた犬は、歩行者信号の赤を突っ切って、しばらく先に立ち止まっていた。そして、カズキを乗せたタクシーが追いついて来ると、再び走り出したのだ。

カズキは、あの犬もおおいを追っているような気がしたのだ。

「なんて、足の速い犬だ……」

タクシーの運転手が、アクセルを踏む足に力を入れ直して呟いた。犬が路地を曲がると、タクシーも曲がった。

カズキは、その間に携帯電話で警察に通報した。

【走るソラ】

空はいつそう暗さを増して、立ち込める雲からは細い雨が落ちていた。アスファルトは次第に黒く染まり、傘を開く通行人が目に止まり出していた。

車の窓ガラスに当たった水滴が、斜線を描いて流れていく。

「あのタクシー、まいたか」

右腕に包帯を巻いた男が言った。

「大丈夫っす。さっきの信号で捕まったみたいです」
運転しているのは相棒の方だ。

包帯の男は、左腕であおいを抱えるようにガッチリとその腕を掴んでいた。

「あなた……この前駅で……」

あおいが言った。

「へえ、さすがだな。声だけで判るってわけだ」

「あたしをどうするんですか」

「俺は、お前のせいで危なく右手の指が無くなるところだったんだ。お前にも少しは痛い目にあってもらわねえとな」

「そんなのおかしいです。あたし、何もしてません。勝手にバックを引っ手繰ったくせに」

「うるせえ」

男は、あおいの腕を強く掴んだまま揺さぶって、怒鳴った。

「あ、兄貴……」

「なんだ」

「い、犬が走ってきます」

「なに？」

包帯の男が振り返って、後ろの窓を覗き込んだ。

それは、次第に強まる雨足を、まるで掻き分けるが如く走っている。踏み締めて蹴りつけるアスファルトから水飛沫が飛んでいた。

「あの犬だ……」

包帯の男はそう呟くと「その先を曲がれ。産業道路に出て、突き放すんだ」

運転する相棒に言った。

「兄貴……」

「今度はなんだ」

「タクシー。さっきのタクシーです」

「なに？」

包帯の男が、気を取られていた犬の後ろに視線を移すと、緩い勾配の向こうに、確かにタクシーの姿があった。

住宅街を抜けて、産業道路に出た男たちの車は

「もっと、スピードを出せ」

包帯の男の声で、相棒はアクセルを踏みなおした。

「兄貴……犬が離れねえよ」

「くそ、なんだあの犬」

包帯の男はイライラした様子で「犬はいい。とにかくタクシーをまけ」

「まけって言っても兄貴。もう一本道だよ」

その時、正面の中央分離帯の影から、パトカーが現れて道を塞いだ。

「ちきしょう。警察に通報しやがったのか」

男たちの車は、パトカーをかわそうとしたが、路面が濡れていた為ハンドル操作を誤り、ガードレールにぶつかった。

「くそっ」

煙を上げて止まった車から、包帯の男はあおいを引っ張り出すと「来い！」

あおいは拒んでみるが、男の力には叶わないし、その手から逃れなくても走って逃げる事もできない。

「止まれ！」

パトカーから出てきた警官が、制止を促すが

「来るな！来たら、この娘を殺す」

男はそう言って、あおいの身体にナイフを突き立てた。

「さっさと来い！」

男に半分引きずられながら、あおいは歩道の横の草むらに引き込まれた。濡れた雑草が彼女の素足を冷たく撫でまわす。

あおいは、デコボコの地面に足を取られて転びそうになってよろけた。

その時、何かが草むらから男に飛び掛った。物凄い勢いで茂みを切り裂くような音がした。

「ガルルル…」

と、微かにあおいには聞こえた気がした。

【確保】

強く捉まれていた男の手が離れると、あおいはよろめいて危うく転びそうになり、手についてそれを凌いだ。

『大丈夫かい?』

声が聞こえた。

「ソラ?」

あおいは、ソラの気配を探しながら応えた。

雑草をなぎ倒しながら、草むらで激しく揉み合う音が聞こえた。

「いてててて。やめろ! 勘弁してくれ」

包帯の男が叫んでいた。

続いて、草むらを掻き分ける複数の足音が聞こえたかと思うと

「大丈夫か!」

「手を上げろ!」

「あおい!」

いろんな声が、いっぺんに飛び交い、警官とカズキが一緒に駆け寄って来て、あおいの身体に触れた。

包帯の男はその場で逮捕された。

相棒の方は、潰れた車の中で気絶したまま捕まった。

「その声は……カズキ?」

「ああ、俺だよ」

そう言って、カズキは、あおいの肩を抱いた。

「カズキ……でも、どうやって?」

「あおいが何時も乗るタクシーのオジサンさ」

「やあ、無事でよかったよ」

タクシー運転手が笑いながらあおいに近づいて

「キミの送り迎えは、けっこうな稼ぎになるからね」

「そうだ、犬が……」

カズキは思い出して、辺りを見回した。

「犬？」

あおいが彼に尋ねると

「ああ、俺たちが信号で一端まかれた時に、道案内してくれたんだ」
あの男たちがしきりに言っていた犬の事だろうとあおいは気付いていた。

あおいも思い出したように

「ソラ。何処なの」

近くに彼の気配は感じなかった。

「ソラ？」

カズキは、怪訝そうに彼女を見つめた。

「帰るの遅くなっちゃうな」

帰りのパトカーの中で、カズキがあおいに言った。

「うん……」

あおいは小さく肯いた。

「俺…… 楽しみにしてるよ。お前に俺を見てもらうの」

「で、でも…… 成功するとは」

「大丈夫さ。きっと大丈夫だよ」

カズキはそう言ってあおいの頭を撫でると、隣にいる警官の目を盗んで、彼女のほっぺたに軽くキスをした。

あおいはハッとして、頬を紅く染め「ちよ、ちよっとお」

「いいだろ、おまじないだよ」

あおいは途端に顔が熱くなり、頭の中味だけが宙に浮いてしまったような気持ちになって、心臓が急激に鼓動を早めるのを感じた。
でもその胸のドキドキで、手術の不安が完全に何処かへ飛んで行くような気がした。

「ン、ウンッ……」

運転している警官が、バックミラー越しに咳払いをして微笑んで

いた。

【エピローグ】

あおいの目の手術が終わってから二週間が経っていた。三日前に梅雨入り宣言が出されたと言うのに、晴れ渡る空には眩しい太陽が輝いていた。

看護師が、あおいの病室の白いカーテンを閉じて、刺激的な光を遮った。

「それじゃあ、ゆっくりと目を開けて」

あおいの顔から包帯を取り去った医師は優しい声で言った。

あおいは怖かった。

この睨った目を開けても尚、相変わらず何時もの暗闇が広がっているのではないかと。そんな恐怖に包まれた。

開けようとする瞼に自然と力が入って、上と下の瞼が別れを惜しんでいる。

「あおい。大丈夫よ」

隣にいる母親が、優しく言った。

「うん……」

わかってる。大丈夫。もしダメでも、今まで通りの事じゃない。今までだって、ずっと暗闇で生きてきたじゃない。

あおいは自分にそう言い聞かせて、ゆっくりと目を開けた。

真っ白だった。

視界の全てが白い輝きに満たされていて、あおいはその刺さるような刺激に思わず目を細めた。

白い世界に何かが浮かんだ。

黒い影が次第に輪郭を整えていった。

それは、あおいの顔を覗き込む母親の顔だった。

そうか、真っ白だったのは、眩しかったんだ。あれが、眩しさだったんだ。

あおいは細めた瞳で、次第に浮び上る色とりどり、と言っても病

室内は白色が多いが、それでも今まで真つ暗な世界で暮らしていた彼女にとっては、最高にカラフルな世界が広がっていた。

「どう？ あおい」

真正面で、母親が不安げな笑みを浮かべていた。

「お母さん…… ずいぶん老けたね」

翌日、あおいが外へ出たいと言うと、医師からサングラスを渡されて了解を受けた。まだ、太陽の光を直接その目に浴びる事は出来ないのだ。

母親が付き添って、彼女は病院から外へ出た。

「目が見えるって、歩くのが楽チンでいいね」

あおいは母に笑って見せた。

スイスイと歩く娘の姿を見た母親の方が、涙で景色が朧になっていて、歩き難かったほどだ。

自然光の陽の下は、サングラス越しでも眩しい明かりに満ちていた。あおいは、花壇に咲いている色とりどりの花を、心行くまでじっくりと眺めるのだった。

もちろん、サングラスを掛けた今のあおいには、肉眼の鮮やかさまでは感じない。それでも建物の隅に咲いているタンポポさえ、彼女には鮮やかに見える。

早くサングラスを外したい。そう思いながら、何度もサングラスのフレームに手を伸ばしては、高揚する気持ちを抑えるのだった。

中庭を通って表までゆっくりと歩いて来た時、病院の敷地の入り口に、一頭の大きな動物が四本足で佇んでいるのを、あおいは見つけた。

精悍な顔付きで、じっと澄ましてこちらを見つめているそれは、初夏の熱い陽光に照らされて背中が薄っすらと銀色に輝き、右眼はヒスイのように青く左眼はエメラルドのような瑠璃色に輝いていた。

それはありふれた雑踏には決して呑みこまれる事の無い、孤高の姿。

「あら、大きな犬。何処の犬かしら」

母親も、それを目に止めて言った。

「あれ犬？」

あおいが、訊き返すと母親は

「そうよ。たぶん、シベリアン・ハスキーね。きれいな眼だわ」

あおいは、犬と言えば小さい頃に近所の柴犬を霞んだ視界の中で一度見たきりだった。

「アレが犬……シベリアン・ハスキー……」

いいえ、アレはソラだわ。

あおいは言葉には出さなかった。

「ありがとう、ソラ」

大きな犬は、あおいを覗いながらゆっくりと向きを変えると、光に満ちた景色の中に軽やかに、そして静かに消えて行った。

END

【エピローグ】（後書き）

最後までお付き合いいただき有難う御座いました。

ソラの過去を描いた、『ソラ』の旅／青雲編／が新たにスタートします。再び、読んでいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8511b/>

『ソラ』の旅

2010年10月8日14時48分発行